

職業観の成分構造の変化とその要因

—私立A大学学生に対する時系列調査の結果から—

伊藤 彰茂

1. 問題の所在と目的

本研究は、2011年3月11日の東日本大震災が、大学生の職業観（働くことの意味）に何らかの影響を与えたのではないかと問題意識から、職業観アンケート調査の分析を通じその要因構造の変化を明らかにしようとするものである。すでに、2010年に職業観調査を実施しており、それと今回の調査結果と比較することによって、学生の職業観の変化を見ようとするものである。

大学生の職業観については、寺田（2006）を中心に筆者も含めて7府県13大学の学生に対し質問紙による集合調査を実施している。その結果は、大学生は職業に対して「社会貢献」や「高い地位につく」ことよりも「生きがい」や「好きなこと」を重視しているということが明らかになった。

職業観の概念について、尾高（1970）は、三つの職業観があると述べている。ひとつは、「自己本位の職業観」であり、もうひとつは「国家本位の職業観」、三つ目は「仕事本位の職業観」である。また、三隅・矢守（1993）は、仕事中心性という価値観の問題として捉えた。いずれにしても、若年者に関しては、寺田（2009）が言うように職業感の形成が課題であり、職業実像の形成を経て職業観につなげていくことが現実的であると述べている。しかし、職業観は、今回の自然災害という避けることが困難な環境的要因によっても大きな影響を受けるものと思われる。職業観形成途の途上にある大学生の意識の変化が、将来の日本人の職業価値観形成にとって大きな意味を持つと考え、本研究を行った。

2. 調査と分析の方法

まず、2010年4月に実施した私立A大学の学生に関する集合調査から、1年生～3年生までの職業観に関するデータ（職業観尺度28項目）を抽出し再分析をおこない、次に2011年に実施した同様の調査から2年生～4年生までの職業観に関するデータ（2010年と

同じ職業観尺度28項目を使用）を抽出し分析を行った。

さらに、2時点における調査データから分析した職業観の構造を比較し、因子（成分）構造の変化について検討を加える。また、2011年調査では、東日本大震災に関する質問項目を設定した。それとの関連についても検討していく。

なお、データの解析はSPSS Version16.0によって行った。

3. 2010年度調査に関する職業観尺度の分析

初めに、2010年4月調査から1年生から3年生までのデータ（191人：男性74人、女性117人）を抽出し主成分分析を行い、学生の職業観におけるいくつかの相互に独立した要因の抽出を行った。

調査参加者の属性は、Table1のとおりである。

	1年	2年	3年	合計
男性	35	14	25	74 38.70%
女性	44	37	36	117 61.30%
合計	79 41.40%	51 26.70%	61 31.90%	191 100%

調査項目のうち、「職業観」に関する質問は、松本（2008）、伊藤他（2006）の職業観に関する「あなたは、職業に就くことによって、どういうことが実現できると思いますか」という28項目にわたる質問をそのまま用いたものである。各項目に対して、5件法での回答を求めた。

3-1. 主成分の構造

職業観尺度28項目に対して主成分分析をおこなった結果、5つの主成分が抽出できた。それぞれ各主成分を構成する項目の意味内容を検討した結果、5つの主成分は、自己実現志向、社会貢献志向、生活安定志向、地位志向、役割志向とした。第1成分は6項目で構成されており、「自分の生きがいとなること」、「自分の夢を追求すること」など、自分の思いや理想を示す内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「自己実現」

志向と命名した。第2成分は11項目で構成されており、社会に対して役割を果たす内容の項目が高い負荷量を示していた。そのことから「社会貢献」志向と命名した。第3因子は、4項目で構成されており、「より多くの金銭を得ること」「自分の雇用を安定させること」といった生活していく上で基盤となる内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「生活安定」志向と命名した。第4成分は3項目で構成されており、「有名人になること」「名声を得ること」など立身出世を望むような内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「地位獲得」志向と命名した。第5成分は3項目で構成されており、「親を助けること」「家庭の生活のために役立つこと」という項目が高い負荷量を示していた。そこで、「役割

志向と命名した。

主成分分析の結果に関する成分行列を Table2 に示す。なお、5つの主成分で28項目の全分散が説明される割合は、64.2%となっている。

3-2. 男女差の検討

男女差の検討をおこなうために、職業観の下位尺度得点について *t* 検定をおこなった。その結果、5つの下位尺度については、男女の得点差は有意ではなかった。(自己実現下位尺度 ($t(189) = 0.643, n.s.$), 社会貢献下位尺度 ($t(188) = 0.288, n.s.$), 生活安定下位尺度 ($t(189) = 0.973, n.s.$), 地位下位尺度 ($t(189) = 1.592, n.s.$), 役割下位尺 ($t(189) = 0.791, n.s.$))。

項目内容	I	II	III	IV	V
自分の生きがいとなること	.82	-.02	-.08	-.04	.18
いつも何かにチャレンジすること	.82	-.13	-.01	.35	-.16
自分の好きなことに打ち込むこと	.78	-.07	-.09	.02	.20
自分の夢を追求すること	.77	.11	-.01	-.12	-.01
専門の仕事の知識や技術(能力)を高めること	.65	.03	.09	-.05	.14
会社の発展に貢献すること	.45	.32	-.10	.25	-.01
次世代の人材を育成すること	.07	.84	.08	-.05	-.17
平和な社会を築くこと	.07	.74	-.24	.04	.26
人類の繁栄に貢献すること	-.16	.74	-.21	.17	.32
国を発展させること	.00	.73	-.18	.24	.08
人の命や安全を守ること	-.07	.72	.01	-.23	.34
雇用主や社長につくすこと	-.19	.54	.27	.32	-.17
仕事や技術・技能を伝承すること	.44	.53	.09	-.10	-.20
他者から自分の能力を認めてもらうこと	-.11	.52	.40	.06	-.03
社会の一員としての義務を果たすこと	.36	.50	.24	-.29	-.11
新しいものをつくりだすこと	.42	.48	-.17	.17	-.08
自分の存在(感)を確認すること	.20	.48	.22	-.04	-.05
自分の与えられた使命を全うすること	.25	.30	.04	.19	.14
より多くの金銭を得ること	.01	-.20	.85	.12	.13
自分の雇用を安定させること	-.04	.03	.84	-.08	.09
よい労働条件を得ること	-.07	.04	.65	.20	.06
自立(自活)すること	.31	-.03	.55	-.08	.30
有名人になること	.10	-.07	.00	.86	.02
名声を得ること	-.05	.31	.10	.62	.01
できるだけ高い地位につくこと	-.07	.01	.49	.55	.04
親を助けること	.07	.04	.18	-.04	.75
家族の生活のために役立つこと	.23	-.10	.19	.08	.62
家族や親族、子孫の繁栄につなげること	-.07	.36	.08	.05	.48
成分相関行列					
I	—	.58	.42	.10	.45
II		—	.41	.40	.37
III			—	.17	.27
IV				—	.16
V					—

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法
a. 13 回で収束。

4. 2011年調査に関する職業観尺度の分析

つぎに、2011年4月調査の結果に関して、2010年4月調査と比較するために、比較対象となる2年生から4年生までのデータ(141人:男性63人、女性78人)を抽出し2010年調査分析と同様に主成分分析を行った。対象者の属性は、Table3のとおりである。

	2年	3年	4年	合計
男性	21	11	31	63 44.70%
女性	40	19	19	78 55.30%
合計	61 43.30%	30 21.30%	50 35.50%	141 100%

4-1. 主成分の構造

主成分分析の結果、2010年と同様5つの主成分を抽出した。5つの成分を構成する項目は、2010年と異なるものの、2010年の分析と同様、社会貢献志向、役割志向、自己実現志向、生活安定志向、地位志向とした。

第1成分は8項目で構成されており、「自分の与えられた使命を全うすること」、「社会の一員としての義務を果たすこと」など、社会(他者)との関係において役割を果たす内容の項目が高い負荷量を示していた。

そのことから「社会貢献」志向と命名した。第2成分は7項目で構成されており、「平和な社会を築くこと」、「国を発展させること」などという項目が高い負荷量を示していた。そこで、「役割」志向と命名した。ただし、その役割は、自分に課す意味での役割という意味を含んでいる。第3成分は4項目で構成されており、「自分の生きがいとなること」、「自分の夢を追求すること」など、自分の思いや理想を示す内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「自己実現」志向と命名した。第4成分は6項目で構成されており、「より多くの金銭を得ること」「自分の雇用を安定させること」といった生活していく上で基盤となる内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「生活安定」志向と命名した。第5成分は3項目で構成されており、「有名人になること」「名声を得ること」など立身出世を望むような内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「地位獲得」志向と命名した。

主成分分析の結果と成分相関行列をTable4に示す。なお、5つの主成分で28項目の全分散を説明される割合は、59.69%となっている。

項目内容	I	II	III	IV	V	
1-1_会社の発展に貢献すること	.81	.00	-.15	-.07	.12	
1-28_仕事や『技術・技能を伝承すること	.63	.33	.03	-.12	-.20	
1-2_自分の与えられた使命を全うすること	.62	-.02	.10	.18	-.04	
1-25_自分の存在(感)を確認すること	.61	.03	.30	-.19	.25	
1-27_社会の一員としての義務を果たすこと	.59	.20	-.03	.11	-.23	
1-22_次世代の人材を育成すること	.59	.45	-.08	-.07	-.18	
1-8_他者から自分の能力を認めてもらうこと	.55	.12	.02	.04	.31	
1-12_専門の仕事の知識や技術(能力)を高めること	.53	.07	.16	.08	-.19	
1-14_平和な社会を築くこと	-.11	.72	.20	.10	.11	
1-21_国を発展させること	.19	.70	-.24	.06	.05	
1-7_人類の繁栄に貢献すること	.11	.68	.02	-.06	.24	
1-15_新しいものをつくりだすこと	.16	.55	.07	-.02	-.10	
1-16_家族や親族、子孫の繁栄につなげること	.02	.47	.03	.26	.24	
1-23_人の命や安全を守ること	.04	.46	.44	.06	-.01	
1-24_雇用主や社長に尽くすこと	.32	.45	-.18	-.02	.36	
1-18_自分の好きなことに打ち込むこと	-.29	.20	.84	.01	-.02	
1-4_いつも何かにチャレンジすること	.14	-.23	.76	-.09	.27	
1-26_自分の夢を追求すること	.38	-.21	.74	-.07	.08	
1-17_自分の生きがいとなること	.08	.13	.70	.02	-.06	
1-11_より多くの金銭を得ること	.07	-.14	-.24	.84	.18	
1-9_自分の雇用を安定させること	-.13	.11	.01	.77	.01	
1-20_よい労働条件を得ること	-.12	.26	-.11	.66	.16	
1-10_自律(自活)すること	-.04	.03	.29	.64	-.17	
1-3_家族の生活のために役立つこと	.29	-.09	.13	.58	-.15	
1-6_親を助けること	.04	.09	.18	.34	-.07	
1-13_名声を得ること	-.20	.30	.17	.00	.77	
1-19_有名人になること	-.12	.22	.03	-.16	.75	
1-5_できるだけ高い地位につくこと	.19	-.25	.04	.30	.75	
成分		I	II	III	IV	V
	I	—	.44	.53	.44	.04
	II		—	.47	.22	.13
	III			—	.33	-.12
	IV				—	-.01
	V					—

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法
a. 9回で収束。

4-2. 男女差の検討

男女差の検討をおこなうために、職業観の下位尺度得点についてt検定をおこなった。その結果、自己実現下位尺度 ($t [139] = -3.68, p < .001$) と生活安定下位尺度 ($t [139] = -1.05, p < .05$) について、男性よりも女性のほうが有意に高く、地位下位尺度 ($t [139] = 2.11, p < .05$) では男性の方が女性よりも有意に高い得点を示した。役割下位尺度 ($t (139) = -1.7, n.s.$) と社会貢献下位尺度 ($t (139) = -1.6, n.s.$) については男女の得点差は有意ではなかった。

Table5 男女別の平均値とSDおよびt検定の結果

	男性		女性		t 値
	平均	SD	平均	SD	
役割	3.61	0.77	3.81	0.64	-1.70
社会貢献	3.19	0.79	3.38	0.68	-1.56
自己実現	3.57	0.77	3.97	0.68	-3.68***
生活安定	3.90	0.75	4.02	0.57	-1.05*
地位	2.77	0.93	2.48	0.73	2.11*

* $p < .05$, *** $p < .001$

5. 2つの調査結果から見る主成分構造の相違

2010年調査と2011年調査の比較・変化を、それぞれの分析結果、特に成分構造から見ることにする。

5-1. 各主成分構造の変化

- ① 自己実現志向成分は、2011年調査の6項目から4項目へと変化した。具体的には、「専門の知識や技術を高めること」、「会社の発展に貢献すること」の2項目が社会貢献志向に移行した。
- ② 社会貢献志向成分は、2011年調査の12項目から7項目へと変化した。具体的には、「次世代の人材を育成すること」、「仕事や技術・技能を伝承すること」、「他者から自分の能力を認めってもらうこと」、「社会の一員としての義務を果たすこと」、「自分の存在(感)を確認すること」、「自分の与えられた使命を全うすること」の6項目が役割志向に移行した。また、「家族や親族、子孫の繁栄につなげること」が役割志向から移行した。
- ③ 生活安定志向成分は、2011年調査の4項目から6項目へと変化した。具体的には、「家族の生活のために役立つこと」、「親を助けること」の2項目が役割志向から移行した。
- ④ 地位志向成分では、変化は見られなかった。
- ⑤ 役割志向成分は、2011年調査の3項目から7項目へと変化した。2010年調査の3つの項目から、「家族の生活のために役立つこと」と「親を助けること」

の2つの項目が生活安定志向に移行し、新たに6つの項目が加わった。具体的には①②③で述べたように2010年調査5の項目に新しい6つの項目を加えた8項目となった。

6. 東日本大震災との関連

2011年の調査では、東日本大震災が発生して1カ月にも満たない時期におこなったことから、震災発生による影響が大であると考え、心的変化等についても尋ねた。特に、「あなたは、東北関東大震災で自分の気持ちや考え方に変化があると感じますか」という質問では、「非常に感じる」・「やや感じる」への回答が69.6%であった。

6-1. 震災の心的影響による職業観の分析

「あなたは、東北関東大震災(その後東日本大震災)で自分の気持ちや考え方に変化があると感じますか」という質問項目に対して5件法で尋ねたところ、「非常に感じる」・「やや感じる」と答えた人の割合は、69.6%であった。そこで、職業観下位尺度の5つを従属変数とし、震災の心的影響を独立変数とした3グループの分散分析をおこなった。その結果、「役割」、「社会貢献」と「自己実現」において有意な差が見られた。(役割: $F(2,132) = 9.870$, 社会貢献: $F(2,132) = 7.641$, 自己実現: $F(2,132) = 7.354$, ともに $p < .001$)。Table6に3分類の各得点を示す。

Table6 震災の心的要因による職業観の分析

	役割	社会貢献	自己実現	生活安定	地位
非常に感じる やや感じる	3.8	3.4	3.9	4.0	2.6
どちらでもない	3.6	3.3	3.7	4.0	2.7
あまり感じない 全く感じない	2.8	2.4	3.0	3.8	2.3

TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較をおこなったところ、「役割」については、「非常に感じる・やや感じる」と「あまり感じない・全く感じない」と有意な差が見られた。「社会貢献」、「自己実現」についても同様に「あまり感じない・全く感じない」と有意な差が見られた。

このことは、震災など避けることができない困難な状況に接し心的影響を受けた場合、「役割」、「社会貢献」、「自己実現」においては、他者との関わりを一層意識する傾向があったことがわかる。

6-2. 震災影響者の有無による職業観の分析

「あなたの身近に東北関東大震災（その後東日本大震災）の影響を受けた人はいますか」という質問項目に対して4件法で尋ねたところ、「被災者がいる」と答えた人の割合は21.4%であり、「避難など影響者がいる」と答えた人の割合は36.9%であった。

上記(1)と同様に、職業観下位尺度の5つを従属変数とし、震災影響者の有無を独立変数とした4グループの分散分析をおこなった。その結果、いずれの下位尺度においても有意な差は見られなかった。(役割： $F(3,99) = 1.615$ 、社会貢献： $F(3,99) = 1.044$ 、生活安定： $F(3,99) = .157$ 、地位： $F(3,99) = .456$)。ただ、「自己実現」($F(3,99) = 2.610$)は、 $p < .05$ に近い数値であったことから、TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較をおこなったところ、「自己実現」については、「避難など影響者がいる」と「いない」とで有意な差($p < .05$)が見られた。

Table7に4分類の各得点を示す。

Table7 震災影響者の有無による職業観の分析

	役割	社会貢献	自己実現	生活安定	地位
被災者がいる	3.8	3.4	3.8	4.0	2.5
避難など影響者がいる	3.9	3.4	4.1	4.1	2.6
いない	3.6	3.2	3.6	4.0	2.4
分からない	3.8	3.0	3.8	4.0	2.5

7. 成分構造変化の考察

2010年調査と2011年調査の分析結果の比較から、職業観を構成する5つの主成分の構成項目の変化が最も大きいものは役割志向であった。特に、社会貢献志向(他者との関係における役割)から役割志向(自分に課す役割)への移行が6項目あった。また、自己実現志向から社会貢献志向への移行も2項目あった。

この移行の背景としては、震災の影響により、これまで社会貢献志向に含まれていた事柄を、自分がしなければならぬ事柄として強く捉えるようになったと思われる。したがって、生活安定志向の項目においても2011年調査の2項目(「家族の生活のために役立つこと」、「親を助けること」)が役割志向から移行してきており、上記6で分析をおこなった震災の影響を強く感じる。これは、尾高(1970)の職業観概念のうち「自己本位の職業観」に近いものであろう。

また、震災による心的影響や震災影響者の有無との関連では、震災による心的影響は、「役割」、「社会貢献」において、大きいことが明らかになった。震災の影響は、少なくとも若者に何らかの目標や自己概念に

客観的な見方を気づかせたものと考えられる。また、自己肯定感につながる他者との関係における自分の役割としての「社会貢献」も、意味あるものとして感じるようになった、と思われる。

震災影響者の有無では、明確な有意差は見られなかったものの、多重比較の結果、「自己実現」では「避難者がいる」との回答者と「いない」との回答者では有意差が見られた。「自己実現」は、自己中心的なところもあるが、「役割」や「社会貢献」とつながった「自己実現」であるという考え方が生まれたように思われる。

このように、震災の影響は若者の職業観に一定の影響を与えたと考えられる。しかし、心的影響がこのように大きいにも拘らず「自己実現」は「役割」や「社会貢献」よりも低いのである。分析の結果に基づいて、改めてこの点について学生にインタビューをおこなった。その結果、「自己実現(夢や憧れ等)」に関しては、いずれの学生も抱いているがその実現の可能性をまったく感じていない、どちらかという期待値は明確にあるが相手からの接触を待つという受動的態度が強い、過去にわずかなことでも失敗の経験があると一歩踏み出すことができない、「自己実現」の中身に職業との結びつきのあるものがほとんどない、などの傾向を知ることができた。

8. まとめ

2010年調査と2011年調査では、わずか1年という時間経過にもかかわらず職業観の成分構造に大きな変化が見られた。変化の1つの要因は、東日本大震災という未曾有の大災害により、職業に関する意識や考え方が影響を受けたためと推察される。

2010年調査の分析で抽出された5つの主成分は、2011年ではより関連の強い項目の集まりとなったように思われる。また、社会貢献志向と役割志向という2つの主成分は、2011年の新たな成分項目からその名称の意味を変える必要性が感じられるのである。つまり、自分に課す意味での「役割」であり、他者との関係における役割としての「社会貢献」という意味として捉え直すことができる。

震災の発生は、結果として今何をなすべきか、何ができるか、といった自分自身の価値に正面から対峙することの必要性を提起したのではないだろうか。

なお、本研究では、職業観尺度の分析を主成分分析によって行ったが、因子分析の可能性についても注意しておきたい。

引用文献・参考文献

- 伊藤彰茂・船津静代・寺田盛紀（2006）「大学生の職業観の構造と形成要因—主に性別・文理別に注目して—」『日本キャリア教育学会第28回研究大会発表論文集』pp168－169.
- NHK放送文化研究所編（2004）『現代日本人の意識構造』（第6版）日本放送出版協会
- 尾高邦雄（1953）『新稿職業社会学』第一分冊 福村書店
- 尾高邦雄（1970）『職業の倫理』中央公論社
- 金井篤子（2003）「高校生の進路選択過程の心理学的メカニズム—自己決定経験とキャリア・モデルの役割」寺田盛紀編『キャリア形成就職メカニズムの国際比較』晃洋書房 pp.25-37.
- 寺田盛紀編（2003）「高校生の進路選択過程の心理学的メカニズム—自己決定経験とキャリア・モデルの役割」『キャリア形成就職メカニズムの国際比較』晃洋書房
- 寺田盛紀（2009）『日本の職業教育—比較と移行の視点に基づく職業教育学』晃洋書房
- 松本浩司（2008）「高校生の職業観の構造と形成要因—職業モデルとの関連を中心に—」『キャリア教育研究』pp57－67.
- 船橋恵子，宮本みち子編著（2008）『雇用流動化のなかの家族』ミネルヴァ書房
- 本田由紀（2009）『教育の職業的意義』ちくま新書.
- 三隅二不二・矢守克也（1993）『日本人の勤労価値観—「第2回働くことの意味に関する国際比較調査」—から』組織科学.
- 矢島修平・寺田盛紀（2009）「大学生の職業観形成における父親の影響—愛知県内の大学3年生へのヒアリングと父親へのアンケート調査を通じて—」『生涯学習・キャリア教育研究』第5号.